

■ 特集「人間関係研究センター40年をふりかえる」

センター紀要の歴史と変遷

“ふりかえり”の一つの試み¹

池田 満

(南山大学人文学部心理人間学科)

はじめに

本稿では、『人間関係研究センター』²が発行している紀要を手掛かりに、センターが歩んできた40年の歴史を、ふりかえる（というより眺めてみる）ことを目的としている。歴史は、見る者によって異なる姿を見せるものである。それは“センターの40年”という、“歴史”という言葉を使うには小さく短い営みであったとしても同様で、設立時から発展に尽力された諸先輩方と筆者との前では、歴史はおそらく異なる姿を見せるだろう。筆者が見るセンターの姿には、誤解や曲解が含まれている可能性も多いにありうるが、“筆者の視点から、そのように見える”というご理解でお読みいただき、誤解や曲解についてはご容赦いただきたい。

Table 1 センターならびにセンター紀要の沿革

1973年	南山短期大学人間関係科設立
1977年9月	南山短期大学に人間関係研究センター（旧センター）設立
1984年3月	旧センター紀要『人間関係』発刊
2000年4月	人間関係科が大学の文学部教育学科と共に人文学部心理人間学科へと発展改組、人間関係研究センター（現センター）設立
2001年12月	現センター紀要『人間関係研究』発刊 以降、毎年3月に発刊され、現在に至る

¹ 本稿を執筆するにあたり、センター事務局の藤田嘉子さん、牧野麻利子さんが、資料の集約にご尽力くださいました。心より感謝申し上げます。

² 以降、本稿では、2000年まで短期大学部に設置されていたセンターを「旧センター」、2000年以降、大学に設置されているセンターを「現センター」とし、両方を総括する際には単に「センター」と記載する。

旧センター紀要『人間関係』の概要

主な構成

旧センター紀要『人間関係』は、毎号組まれる「特集」を中心に、「特別研究会」「ミニレクチャー」「研究ノート」などのカテゴリから構成されていた。

「特集」は、旧センター紀要の中核的なコンテンツである。毎号、様々な特集が生まれ、主にセンター員が特集内容に沿った記事や論文を寄稿していた。

「特別研究会」は、センター外から講師を招き実施した研究会の逐語録をもとにしており、現センター紀要の「公開講演会」に相当すると考えられる。毎号の講演者名を見ると、第2・3合併号（1985年）では故・河合隼雄氏（京都大学名誉教授、元・文化庁長官、臨床心理学者）、第10号（1992年）では村上陽一郎氏（東京大学名誉教授、国際基督教大学名誉教授、科学哲学者）などの名前が見られる。

「ミニレクチャー」は、旧センターが実施していた人間関係講座や、短期大学人間関係科で開講されていた体験学習の授業の中で行われた、小講義を取り上げ記事としたものである。ミニレクチャーは1992年にアンソロジーとして『人間関係トレーニング：私を育てる教育への人間学的アプローチ』³というタイトルで書籍化されている。

「研究ノート」は、数号にのみ掲載された記事カテゴリである。研究とは称されているものの、多くが短期大学人間関係科での授業実践の報告である。

旧センター紀要の特徴

ここまで概観したうえで、旧センター紀要には次の三つの特徴があるように思われる。第一に、旧センター紀要の執筆者のほとんどはセンター員で、外部者からの投稿記事はごくわずかであるという点である。第二に、旧センター紀要は、センターの活動記録あるいは実践報告であったと考えられる。掲載されている記事の多くが、実践の報告や体験に基づく論考であり、いくつかみられる「研究ノート」も、ほとんどが短期大学人間関係科での授業実践をふりかえるものである。三つ目の特徴として、旧センター紀要（並びに旧センター）は、短期大学人間関係科と一体として捉えられていたと思われる。特に初期に発刊されたものでその色彩を色濃く見て取れる。例えば第2・3合併号の特集は、まさに短期大学人間関係科の教育をふりかえるもので、およそ70ページにわたって人間関係科のカリキュラムが紹介されている。

このような特徴を持った背景を想像すると、いくつかの要因を推測することができる。第一に、旧センターや短期大学人間関係科で行われていた教育実践を、報告する媒体が、当時は限られていたのではないかと思われる。当時は現

³ 津村俊充・山口真人（1992）. 人間関係トレーニング：私を育てる教育への人間学的アプローチ ナカニシヤ出版

在以上に実証主義的研究がもてはやされており、センターで行われていたような、萌芽的実践を紹介する場が限られていたのではないか。一例を挙げれば、教育に関わる心理学分野の日本の学術誌として高い地位にある“教育心理学研究”において、「実践研究」という投稿カテゴリが設けられ第一号論文が掲載されたのは、現センターが設立されたのと同じ2000年に刊行された第48巻第3号であった。つまり、また成果は詳らかではないが、意欲的かつ先駆的な取り組みを世に広めるために、その場として創り出されたものが旧センター紀要であると推測される。

また、本号で石田裕久氏が述べているように、当時、高等教育において人間関係教育を取り上げるという先駆的取り組みに対して、無理解（むしろ批判）が強く、取り組みの意味や意義を世に投げかけ続ける使命も、旧センター紀要は帯びていたのかもしれない。

旧センター紀要に見られるこのような特徴は、旧センターそのものを特徴づけるものでもあるかもしれない。短期大学人間関係科での人間関係の学びと、旧センターでの人間関係の研究は輻輳的なものであり、ここでいう研究とは狭義の科学研究を意味するものではなく、広く人間関係のための取り組みを研（み）がき究（きわ）める場であったのだろう。

現センター紀要『人間関係研究』の概要

主な構成

現センター紀要は、現センター設立の翌年2001年12月に創刊され、その後、2002年度末にあたる2003年3月から毎年、3月発刊となっている。現センター紀要の構成は「特集論文」、「Article」、「実践研究」、「研究ノート」、「実習」からなっている。

「特集論文」は、旧センター紀要の「特集」に相当し、特定のテーマに沿った論文や記事を集めたものとなっている。旧センター紀要との違いとして、「特集論文」の執筆者には、センター員ではない人も多く含まれることが特徴的である。“センター内外から広く投稿を求める”という姿勢は、現センター紀要での大きな変化であり、「Article」と「研究ノート」にも当てはまるものである。

「Article」と「研究ノート」は、所謂、研究論文を投稿するカテゴリであると考えられる。旧センター紀要にも「研究ノート」というカテゴリが掲載された号が三つ存在しているが、内容を見ると短期大学人間関係科での授業実践についての報告がほとんどである。それに対して現センター紀要では、「Article」として掲載するに相当する実証研究としての性格は薄くとも、萌芽的な展望論文や実践の報告などが「研究ノート」として掲載されている。「Article」、「研究ノート」いずれもセンター外からの投稿を積極的に受け入れ、査読システムも存在している。ただしセンター員による投稿の場合には、査読の有無を選択できる。

「実践研究」は、文字通り、人間関係の学びに関わる実践を報告するカテゴリとして設定されている。「実践研究」は2000年代には散発的に掲載されていたが、2010年以降、掲載実績がない。しかし近年、実践の報告を掲載するニーズが高まり、2018年10月以降、現センター紀要のカテゴリとして正式に投稿規程に明記された。

「実習」は、2008年第7号から登場した新たなカテゴリである。ラボラトリー方式の体験学習では、学習者の学びを促進するために、日々、新たな取り組みや実習が作られ、試みられている。「実習」カテゴリには、こうして新たに開発された実習を記載するものであり、2008年以降、継続的に掲載されているカテゴリといえる。

現センター紀要の特徴

ここまで現センター紀要を見てみると、その最大の特徴は、執筆者をセンター外から積極的に求める姿勢への転換であったと思われる。またセンター外からの投稿を積極的に受け入れるようになったことと呼応して、旧センター紀要で中核的テーマとして扱われていたラボラトリー方式の体験学習の色彩は薄れ、広く、人間関係に関わる多様な研究が掲載されるようになった。加えて、現センター紀要では、相対的に狭義の“研究”論文の掲載が増加したように見られる。この点を含め、本稿では、投稿記事の計量テキスト分析から「Article」の内容について、さらなる検討を試みる。

計量テキスト分析による紀要記事分析の試み

本稿では試みとして、「Article」として掲載された42編の論文表題に使用されている単語の頻度を手掛かりに分析を行う。特に多く使用されていた単語ごとに、表題をTable 2に示す。なお、抽出された頻出語に基づく分類のため、Table 2に掲載した表題には重複がある。

分析によって抽出された語のうち最も頻度が多かったのは“Tグループ（6件）”であった。6編の執筆者はセンター内、外ともにあり、査読を経たものも含まれている。内容面を見ると、Tグループの参加者だけではなく、トレーナーに焦点を当てたものもある。ラボラトリー方式の体験学習の中核をなすTグループが再頻出語として抽出されたことは、色彩が薄れたとはいえ、ラボラトリー方式の体験学習が現センター活動の中心にあり続けていることを象徴しているといえよう。

次いで多く抽出された語は“箱庭作成（5件）”であった。これは2013年第12号から2015年第14号まで、単一の著者によって集中的に投稿されたものである。したがって、現センターの特徴に“箱庭作成”が加わったと判断する事実とは言えないだろう。しかし、現センター紀要の間口が広がったことは間違いない。

以降、“人間関係”、“体験学習”、“トレーニング”の3語が、いずれも4件抽

Table 2 表題に見られる頻出語と表題

号	表題
Tグループ (6件)	
3	カウンセラーとトレーナーとの個人内統合に関する探索的研究—個人カウンセリングのカウンセラー、Tグループのトレーナー体験を基にした、ラフスケッチ—
4	インドにおけるラボラトリー・トレーニングの歴史と特徴—Tグループを中心に—
5	Tグループの体験を通しての自己理解
11	Tグループにおけるトレーナーのファシリテーション、学習観・トレーニング観に関する質的研究
13	Tグループにおける他者との関わりを通じた在り方の変容の過程 (1)
14	Tグループにおける他者との関わりを通じた在り方の変容の過程 (2) —体験過程が進展した参加者の語りのKJ法による検討—
箱庭作成 (5件)	
12	箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究
12	箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討—多元的方法・方法のトライアングュレーション、M-GTAを中心に—
13	箱庭制作者の主観的体験に対する系列的理解を中心とした質的研究
14	M-GTAによる箱庭制作過程の促進機能に関する研究—コアカテゴリー①【内界と装置の交流】に焦点を合わせて—
人間関係 (4件)	
8	キャリア教育に「人間関係」は必要か—その位置づけの吟味—
10	人間関係における「プロセス」を再考する—G. Weinstein, E. H. Schein & W. B. Reddyのプロセスの視点より—
13	人間関係づくり授業における現場教師とファシリテーターとの協働性に関するアクションリサーチ
13	体験学習法を用いた人間関係トレーニングにおけるハンドベル演奏活動の試み
体験学習 (4件)	
創	“環境教育”と“体験学習”：その接点と将来の展望
10	ティーム・ティーチング—ラボラトリー体験学習における意味を探る—
12	ラボラトリー方式の体験学習を通して得られる気づきに関する検討
13	体験学習法を用いた人間関係トレーニングにおけるハンドベル演奏活動の試み
トレーニング (4件)	
4	インドにおけるラボラトリー・トレーニングの歴史と特徴—Tグループを中心に—
10	オン・ザ・ジョブによるファシリテーター・トレーニングの意義—スクールカウンセラーを対象としたグループ・アプローチ研修の実践研究
11	Tグループにおけるトレーナーのファシリテーション、学習館・トレーニング観に関する質的研究
13	体験学習法を用いた人間関係トレーニングにおけるハンドベル演奏活動の試み

出された。「人間関係」が表題に使用された論文には、論考と実践に基づく実証的な研究の両者が含まれている。上記の“箱庭作成”も含め、実証的研究の掲載数が増加したことも現センター紀要の特徴として数量的にも確認できたものと

思われる。

“体験学習”は、“ラボラトリー方式の体験学習”の略称として使用されている論文表題が多い。この特徴は、現センターの活動の中心にラボラトリー方式の体験学習があることを示していることに加え、現センター紀要では、体験学習という語が、ラボラトリー方式の体験学習を示す符丁として通用している事実を示しているといえよう。

“トレーニング”という語についても同様のことが言える。2005年第4号にある“ラボラトリー・トレーニング”は、ラボラトリー方式の体験学習とほぼ同義であり、2011年第10号、2012年第11号の表題はいずれも、明示的、暗示的に、ラボラトリー方式の体験学習を素材とした論文であることは明確である。

ここまで、Articleに掲載された論文表題の分析から、現センターの特徴が、紀要にも明確に表現されていることが明らかとなった。すなわち、(1)ラボラトリー方式の体験学習の色彩は、旧センター紀要と比べてやや薄れつつも、現センターの中心に置かれていること、(2)センター外からの働きかけを積極的に受け入れていること、あるいはセンター外からの関心が強くなっていること、(3)活動の報告やセンター員による論考だけでなく、狭義の研究の掲載を積極的に推進していること、という三つの特徴が、現センター、並びに現センター紀要に表れているといえる。

おわりに

ここまで、センター紀要をふりかえり、そこから見えてくる特徴について考察してきた。そこからは、旧センター紀要が、旧センター設立の母体である短期大学人間関係科の先駆的な取り組み、特にラボラトリー方式の体験学習を、さらに社会に広める術となっていたことが見出された。そして現センター紀要は、旧センター紀要に求められた役割に加え、さらに広く人間関係に関わる学術研究推進の中心を目指している取り組みであることが明らかとなっていた。新センター紀要も、創刊から間もなく20年を迎えることとなるが、今後、さらにどのように展開していくのか、そして後の世の人が、その展開をどのようにふりかえり、分析を試みるか、楽しみでならない。